

聖書: ヨシュア記 5:1-15

説教題: 足のはきものを脱げ

日 時: 2010年5月9日

イスラエルはついに主の不思議な御手によって、ヨルダン川を渡り、約束の地カナンへと入って来ました。それを聞いたヨルダン川西側の王たちの反応が1節に記されています。2章ではカナンの住民たちが、ヨルダン川東側におけるイスラエルの勝利を聞いて震えおののいていたと記されましたが、そのイスラエルが自分たちの領土に入ってきたことを聞いて、カナンの王たちの心は完全にしなえ、誰にも勇気がなくなっていました。イスラエルにとっては願ってもない状況です。相手はすでに戦意喪失しています。今こそ間髪おかずに攻め入るべき最高のチャンスではないでしょうか。

しかし主はそのようにはイスラエルを導かれませんでした。主がまず命じたことは、「火打石の小刀を作り、もう一度割礼をせよ」ということです。この割礼は、イスラエルが神の民であることを示す契約のしるしです。具体的には男性の性器の包皮を切り取ります。これを施した直後は数日間、男たちは戦うことが不能になります。前に創世記34章で、ヤコブの息子たちがこれを悪用したことがありました。妹ディナが辱められたことへの復讐として、ハモルの子シェケムとその町の者たちと同盟を結ぶように見せかけて割礼を受けさせ、3日後の彼らの傷が痛んでいる時に彼らを襲ったことがありました。そういう意味では、約束の地に入った直後にこの割礼を施すことは危険なことではないでしょうか。せっかく敵の心が弱っているのに、なぜ自分たちを傷つけ、その力を削ぐようなことをすべきでしょうか。

しかし主は具体的な戦いよりもまずこれを優先すべきこととして、イスラエルに命じました。彼らの多くは、割礼を受けていませんでした。4節にありますように、エジプトから出て来た男子は皆、この割礼を受けていました。しかし彼らは最初に約束の地を探った斥候たちの報告を聞いて、自分たちはこの地に住む巨人たちには勝てないと泣き叫び、主に信頼しませんでした。その結果、主は当時20才以上の者は、信仰を表明したヨシュアとカレブ以外、一人も約束の地に入ることはできないと言われました。それ以来の40年の旅は、一人また一人と、不信仰に対する裁きが成就して行く旅でもありました。そしてその間に生まれた子供たちは未だ割礼を受けていなかったのです。

しかし主はイスラエルをお捨てにならず、ここでもう一度、彼らに割礼をせよと言われます。主はこのことを通してご自身が彼らの神でいて下さることをもう一度証しして下さいました。これは9節にあるように、エジプトのそしりを取り除くものでもありました。「エジプトのそしり」とは次のようなものでしょう。「主は約束の地にイスラエルを導き入れることができないので、あるいは彼らを憎まれたので、彼らを荒野で死なせるためにエジプトから連れ出したのだ。」しかし主はあわれみと忍耐をもってイスラエルをついに約束の地まで導かれ、ご自身が真実な神であることをもう一度証しして下さいました。このようなご自身との関係を再度確立するための割礼を、主はまず先になすべきこととして彼らに求められたのです。

次に行われたのは10節以降の過越です。過越とは出エジプトの時、子羊の血をかもいと二本の門柱に塗ったイスラエルの家は主の裁きが過ぎ越したことを覚えるためのものです。これは割礼を受けた者のみが祝うことができると律法に規定されていました。彼らはどんなに感慨深くこの祝いにあずかったことでしょうか。彼らはエジプトの苦役の下から救い出され、今確かに約束の地にいます。そし

てこの祝いの日の翌日から、彼らはこの地の産物を食べ始めたと記されています。乳の蜜の流れる豊かな土地の産物です。

しかし私たちはここでカナンの土地の美味しい食べ物よりも、神との契約関係が正しく回復されたことの意義に注目すべきです。40年に渡る荒野での試練の期間が終わり、主なる神との関係が今、新しく確立されました。彼らは割礼を身に受け、また過越の祝いにあずかりました。この神との正しい関係の回復こそ、その他のすべてに勝って先んずべきことです。この割礼と過越は、今日の洗礼と聖餐に当たります。主はこれらをもって、ご自身が私たちの神でいて下さることを証し下さっています。今日の箇所です。主がまずこのことをイスラエルに命じられたことを思う時、私たちは決して今日の洗礼式や聖餐式を軽んじてはならないと教えられます。ある人は信仰があれば、こんな外面的な儀式は…云々、と言いますが、聖書の考え方はそうではありません。信仰がない単なる外面的な儀式にはもちろん意味がありませんが、その反対に内面的実質ばかり主張して、外面的儀式をおろそかにするのも聖書の立場ではありません。主は今日の箇所です。イスラエルに割礼を求められたように、信じた者たちが洗礼を受けることを求めています。またイスラエルが過越の祝いにあずかったように、それに対応する聖餐式に私たちがあずかることを御心としておられます。私たちはこの主の方法に従うことを通して、初めて主との正しい関係に導き入れられるのです。この主との正しい関係の確立こそ、あらゆる課題に先立って私たちが取り組むべき第一の事柄なのです。

さて、この章最後の13～15節には不思議なエピソードが記されています。13節の最初に「さて、ヨシュアがエリコの近くにいたとき」とあります。彼は最初の攻略地エリコにどのように攻め入るべきか、思案しながら、一人でこの場所にいたのかもしれませんが。その彼が目を上げてみると、そこには一人の抜き身の剣を手に持った人が立っていました。「抜き身の剣を手に持っていた」とは、すでに戦う準備ができているということでしょう。一体あなたは私たちの味方なのですか、敵なのですか、とヨシュアはその人に尋ねます。それに対する彼の答えの第一声は何だったのでしょうか。それは「いや」というものでした。どうしてこんな冷たくも思える返事をしたのでしょうか。この箇所全体から見ると、この人はヨシュアを助けるために来た人であることは疑い得ません。であるなら「あなたの味方だ」と言ってくれても良かったのではないかと。しかし彼がこう答えたのは、ヨシュアの問いには不適切な考え方が含まれていたからです。ヨシュアは「あなたは私たちの味方なのですか、それとも私たちの敵なのですか。」と問いました。しかしこの主の軍の将なる人は、次のことをヨシュアに教えたい。すなわちわたしがヨシュアに付く側の存在なのではない。ヨシュアが戦いの主で、わたしがその後に従うのではない。あくまで主の軍の将が「主」なのです。そしてヨシュアがこの人のあとに従うのです。そこにこれから戦いに臨もうとするヨシュアの訂正されなければならない考え方があったのです。

私たちがいつしかこのように考えてしまいやすいものです。すなわち神を私の後ろに従わせようとする。私が主であって、神には私のことを手伝ってもらいたい。しかしそれではあるべき立場が逆転しています。私が主ではなく、主なる神こそが本当の主。私はそのあとに付いて行くしもべなのです。

ヨシュアはこの目の前の人が主から遣わされた特別な存在であることを悟り、顔を地につけて伏し拝み、言いました。「わが主は、何をそのしもべに告げられるのですか。」その時、主の軍の将はこう言ったと最後の15節にあります。「『あなたの足のはきものを脱げ。あなたの立っている場所は聖なる

所である。』そこでヨシュアは、そのようにした。」 かつてモーセも燃える柴の中から語られた主とお会いした時、同じことを言われました。そこは聖なる主が現れた場所であるがゆえに、聖なる所である。「聖」という言葉の基本的な意味は「区別された」というものです。すなわち神は私たちと全く区別されるお方。私たちと同じ次元で考えることはできない、とてつもなく偉大なお方。そのような絶対に聖いお方の前でくつをはいているようであってはならない。それを脱いでひざまずかなければならない。そのような偉大なお方の御前にいることを自覚して、礼拝せよということです。これはただヨシュアを恐れさせ、ビクビクさせるためのものではありません。むしろ足のはきものを脱いで真にひれ伏す時、私たちは大いなる望みに支配されるのです。なぜなら私と共にいて下さるのは、この聖なるお方であるということが分かるからです。この霊的現実を真に悟ったなら、私たちには何も心配がなくなるはずでしょう。

逆から言えば、私たちが様々な課題や困難を前にして悩むのは、この神の聖さに目が開かれていないからでしょう。その偉大さを知らないでいるからでしょう。足のはきものを脱いでいないからでしょう。神をそれだけ小さく考えているからでしょう。そこに今日の箇所を通して私たちも導かれなければならない課題があるのです。

素晴らしい事実は、主が私たちの戦いを先陣を切って戦って下さるということです。主はすでに抜き身の剣を手にしてスタンバイしておられます。そのような準備万端整った方が、すでに私たちと共にいて下さるのです。私が主人で、私が主なる神に指令を出し、動かし、働いてもらうではありません。私たちは色々な状況で自分を主役のように考えているから、どのようにしようか、一生懸命知恵を絞り、考えあぐねているのです。しかし私が主ではなくて、主ご自身が主導者です。その方はすっかり準備完了の状態にあられます。私たちに必要なのは、この主を仰ぎ、礼拝することではないでしょうか。

私たちはその主との関係を見直し、いつも正しい関係に立たせて頂く者でありたい。洗礼式と聖餐式を大切に考え、これを通して神の民としての恵みに生きることを確かなものとさせられたい。そして私たちが遣わされて出て行く先々で、まず主を礼拝し、足のはきものを脱ぐことができますように！そうする時、私たちはとてつもないお方が共にいて下さることを知って、何にも代えがたい勇気と力を頂くことになります。そしてその共にいて下さる聖なる方が、目の前のどんな困難をも打ち破り、私たちが勝利の生活へ導き入れて下さるのです。